

企画展「小吉 勝海舟を育んだ父」 プレイバック①

収蔵資料に見る勝小吉（夢酔）の生涯 〈イントロダクション〉

星川 礼応

「勝海舟がその生涯を通じて薫陶・影響を受けた人物は？」という質問は極めて難問である。その多彩かつ広範囲にわたる人脈の中から絞ることは難しい。しかし、「海舟が初めて影響を受けた人は？」と問われれば、彼の父親である「勝小吉」を挙げるだろう。子は初めに、親の姿を見て育つからである。

しかし、この父親は只者ではない。

小吉というと、彼の法号「夢酔」を冠した『夢酔独言』(1)の筆者として認知する人も多いと思う。

おれほどの馬鹿な者は世の中にもあんまり有るまいと思ふ、故に孫やひこのために
はなしてきかせるが、能々不法もの、馬鹿者のいましめにするがいゝぜ、

このように筆が起こされている本書は、当時42歳の小吉自身がこれまでの行いを反省し、子孫への戒めを込めてその半生を赤裸々に綴った、痛快な自叙伝である。親しみやすい口語調で、二度の出奔や喧嘩に明け暮れた少年時代の様子、就職活動の挫折と奔放な生活ぶり、本所・浅草界隈の顔役として町人や旗本の世話を焼いた姿などが、当時の江戸の情景と共に語られている。9歳の息子・麟太郎（後の海舟）が病犬に股間を噛まれ重傷を負った際、必死に介抱したという有名な話も、出どころは本書である。

但し、これらのエピソードが一般に知られるようになるのは近代に入ってからである。というのは、『夢酔独言』自体が、小吉が身内に向けた書物であり、刊行されて広く世間に出回るようなものではなかったからである。『夢酔独言』発見の経緯については、勝海舟の研究でも知られる勝部真長氏の解説(2)に詳しい。これによると、『夢酔独言』の存在が初めて世に出たのは、明治時代に刊行された雑誌『旧幕府』(3)に連載された時とされる。こ

の雑誌は、旧幕臣で海舟と直接親交があった戸川残花とがわざんか（安宅やすいえ）が、幕末の歴史資料の纂集さんしゅうを目的として編集し明治30年代に刊行したもので、『夢酔独言』は、海舟死去から間もない明治32（1899）年10月刊の第3巻8号から翌年5月刊の第4巻5号にかけて収載された。さらに、戦前に改造社が刊行した『海舟全集』^{（4）}にも収録されたことで、『夢酔独言』の存在は広く知られることになったと思われる。昭和の小説家で「馬込文士」の一人として大田区とも所縁が深い子母澤寛しもざわかんも、これを素材として小説『父子鷹』、『おとこ鷹』を執筆し、昭和30（1955）年から翌年にかけて「読売新聞」に連載された。

しかし、『旧幕府』収録版は誤植等が多く、それらは改造社の『海舟全集』にもそのまま引き継がれた可能性が高いという。そこで勝部氏は、当時戸川家が所蔵していた『夢酔独言』の原本^{（5）}に当たり、改めて校訂を施して刊行した。これが、現在知られる『夢酔独言』のベースとなっている。

さて、従来の小吉の生涯の叙述は、ほぼこの『夢酔独言』頼みであったと言ってよい。小吉関係資料というと、この他に『詠め草』^{（6）}や『平山龍先生遺事』^{（7）}といった天保10年代の自記数点が僅かに知られてきた程度で、他にはほとんど知られてこなかった。こうした資料的制約が、小吉の生涯の解明を困難にしてきたことは言うまでもない。

そんな状況の中、当館収蔵資料の調査研究の過程で、複数の小吉関係資料が発見された。中には『夢酔独言』の記述と対応する資料や、小吉の最晩年である嘉永3（1850）年当時の資料まで含まれていた。特に後者は、これまで全く不明であった『夢酔独言』執筆後の小吉の余生に光を当てる新出資料として注目される。

これらの発見と、昨年小吉没後170年を迎えたことを記念し、勝海舟記念館では、令和3（2021）年3月19日（金）から6月27日（日）にかけて企画展「小吉 勝海舟を育んだ父」を開催した。会期を終えた今、本展のプレイバックを兼ねて、数回にわたる展示資料の紹介を行っていきたい。その後の資料の調査研究成果をも踏まえ、新たに判明した小吉の生涯について紐解くこととしたい。また、資料についても適宜文字起こしを施し、今後の資料活用のを図る。

なお、本稿では必要に応じ『夢酔独言』のエピソードを引用するが、それはほんの一部に過ぎない。原書には小吉の人柄を表す面白い話が数多く収載されているが、本稿では大幅に割愛せざるを得ない。よって、これを機に是非原書に触れていただければ幸いである。

- 1 勝部真長編『夢酔独言他』（東洋文庫138）（平凡社、1969年初版第1刷、1981年初版第14刷）。
- 2 註1前掲書169～189頁。特に170頁参照。
- 3 2003年に、マツノ書店から『旧幕府』全5巻（付総目次）として復刻された。『夢酔独言』が収載されている『旧幕府』第3巻8号～第4巻5号は、復刻版第4巻に収められている。
- 4 海舟全集刊行会（代表者宇佐彦麿）編『海舟全集』第九巻（改造社、1928年）
- 5 小吉の孫・疋田孝子（海舟二女）を経て旧幕臣戸川家に伝来。現在は、東京都江戸東京博物館に所蔵されている。
- 6 天保11（1840）年成立。江藤淳編『勝海舟全集別巻 来簡と資料』（講談社、1994年）555頁～566頁所収。
- 7 註1前掲書133～168頁所収。